春色辰巳園

へ13
2907
1

へ13
2907
1-4
門 へ13
冠 2907
巻 1

桜齋餘興 春色辰巳園 全

黄帝の后嫘祖本家本元の事。是を

義氏和氏と云二人の者頭命を受て

暦を改む帝嘗て是を

次第々々に改ず 暁よりも

より。夏暦の如く大凡四季

本朝へ出見安生の

書籍之印
津田安麿
昭和九年七月六日 購求

中国(ちうごく)の書(しよ)博士(はかせ)賀茂保憲(かものやすのり)といふ人(ひと)久(ひさ)しく傳(つた)へその曆(こよみ)を作(つく)りて久(ひさ)しく。さるに狂訓亭(きやうくんてい)主人(しゆじん)先年(せんねん)梅暦(うめごよみ)の自序(じじよ)を筆(ふで)を止(とゞ)めて彼(かの)天地(てんち)陰陽(いんやう)變易(へんえき)順逆(じゆんぎやく)相対(あひたい)吉凶(きつきやう)得失(とくしつ)の大仕掛(おほしかけ)を書(かき)編(あみ)て久(ひさ)しく筆(ふで)を止(とゞ)めて天下(てんか)の宝(たから)又豈(またあに)よなくぶ物(もの)ならんや。

男女(だんぢよ)の婬楽(いんらく)を誡(いましめ)むるものをもつて勧善懲悪(くわんぜんちやうあく)の書(しよ)と思(おも)ふ。

悪(あく)を世話狂言(せわきやうげん)と云(いふ)。さるにめでたきものゝ。書(しよ)の肝要(かんよう)の欲(よく)甚(はなはだ)しきを見物(けんぶつ)をあやぶみ現(うつゝ)を好(この)み。今一冊(いまいつさつ)もよおぶ餘興(よきやう)歟(か)。

雷(らい)の変(へん)切(せつ)なれ共(ども)。捨(すて)ずして書(かく)。

白(しら)ひの深(ふか)き川(かは)の世界(せかい)題而(だいして)無色(むしき)庵(あん)已園(いゑん)云(しるす)

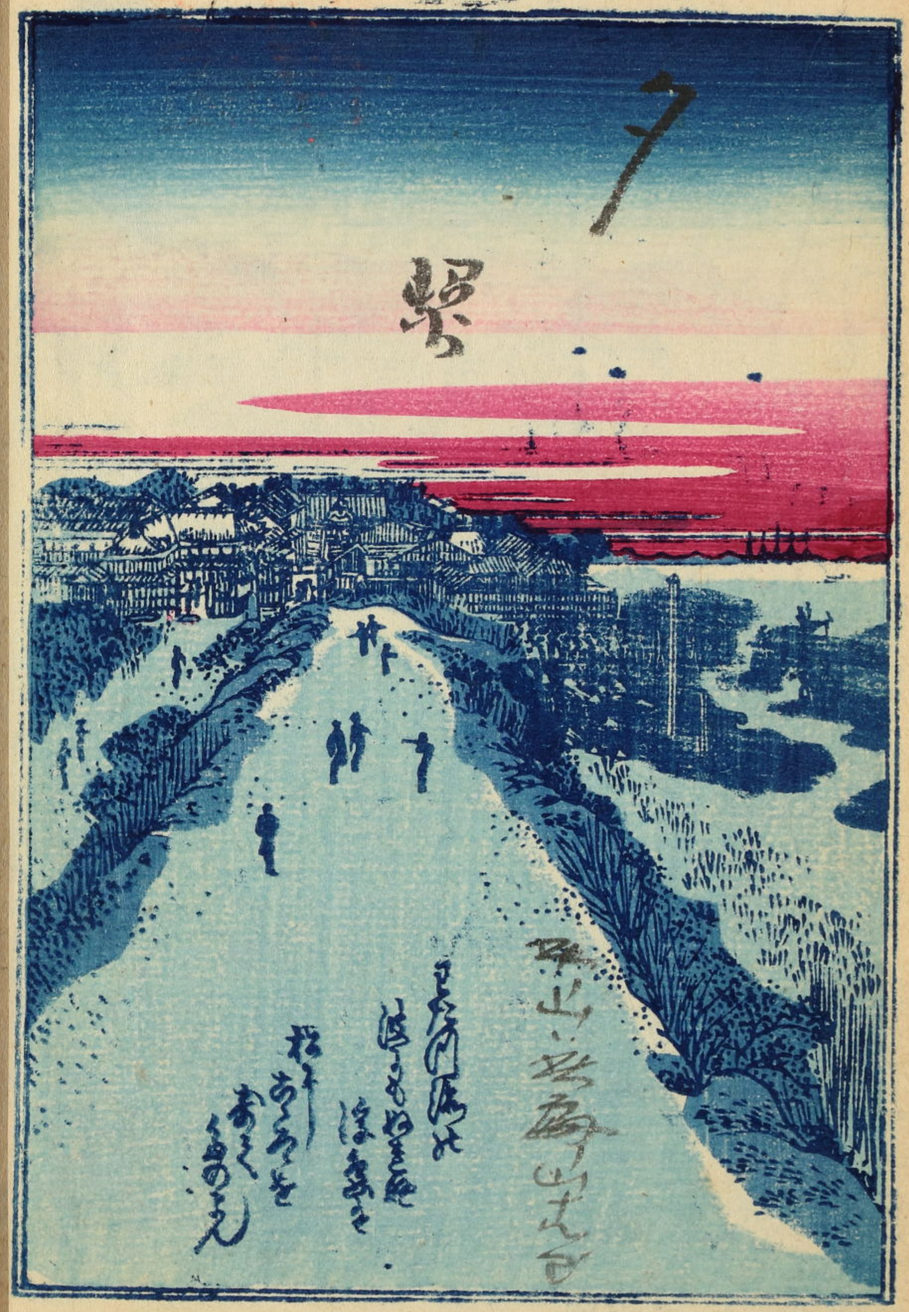
よくもの云ざまでぺりくと。
鳴海絞向のいきれ。
くめてひきこのけうのよ
三筋の糸巴の掏よ。
波の厚弐寸壱の仇競
さまざまを彩つまを。

料理茶屋事業。
うまく紙味そひのふ。
積たもの云
干時天保四巳春狂

三亭春馬

仙女香
美女香

富士の白酒
金龍山人



梅暦 余興 春色辰巳園 巻之一

江戸 狂訓亭主人著

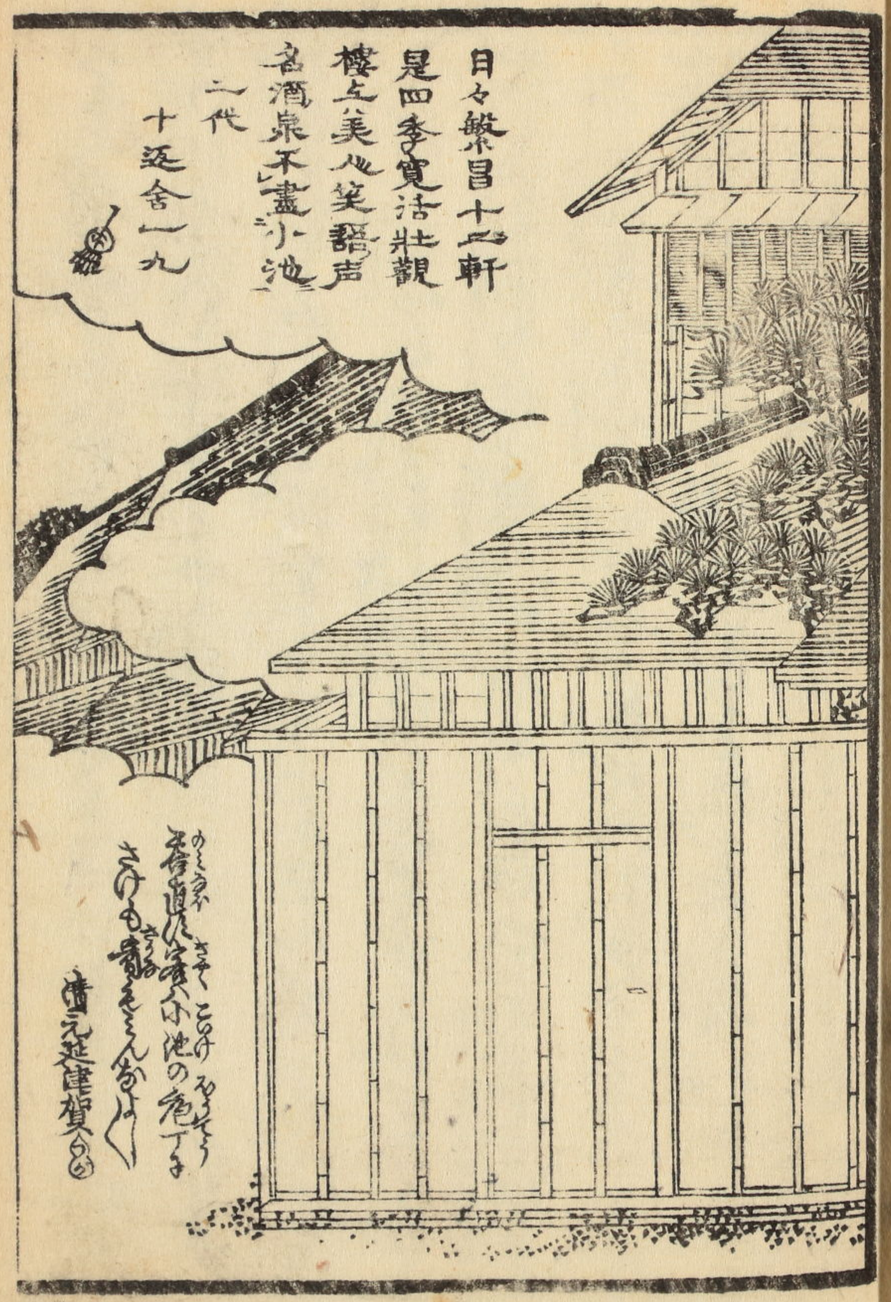
此書籍ノ貸却又ハ賃入セントスル者アル時ハ直チニ御届知ラセタノ津田安麿

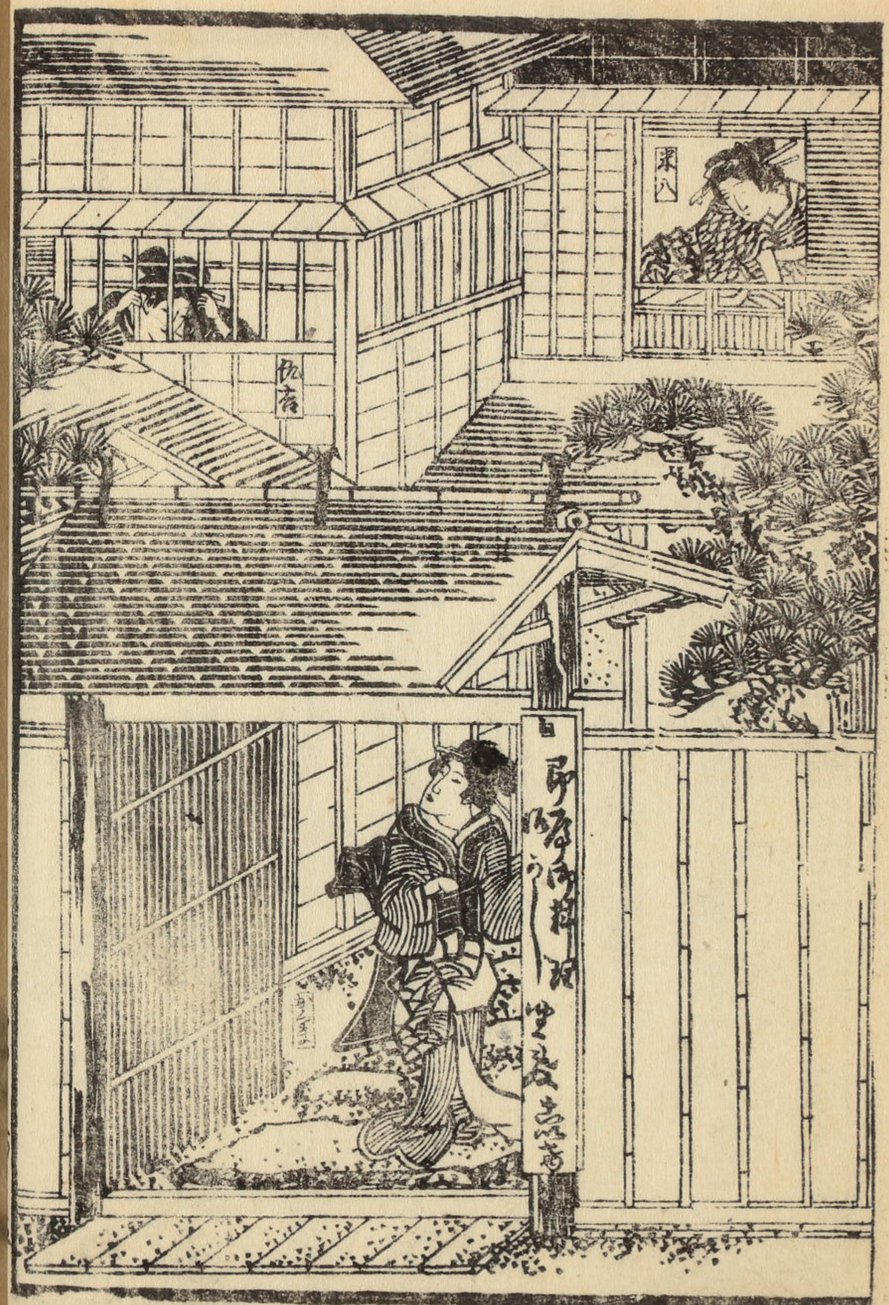
第一回

そもそも春の雪の朝に二うらの小家静かのめりと日足のうら我が名を十二単の袖八重九重尺八もそれぞれの一ト撫世事ぐ丸めくくり三軒の會席に小池と申す実も見世のかりさへ直ぐ柱も杉皮附つくろ

ねぎもおのづから土地よく合ひ
まゝ呑東一く意氣に入る客の絶るもあり一ゞ今日も
尾花の樓から此處に何うもまく赤飯る彼梅
ゝる跡小殘り一女妓の中に
暮ゝく看官のお待遠さま
さ一もひよこ〳〵醉ゝく仇吉
覗きく仇 一ヲヤお稽さんちよ
この小池の座ま二階のゝ
ゝゝゝ

母のごトくにそだてくれるおばさんの
事ハ忘れ申さず候ハヽ御ゆるしを
願ひ上まいらせ候ハヽ御ゆるしを
願ひ上まいらせ候ハヽ御ゆるしを
願ひ上まいらせ


日々繁昌十二軒
是四季寛活壮観
楼上美人笑語声
名酒泉不尽小池
二代
十返舎一九


求八
仇吉

ぐまくあてうりゆくをゝうけぐごう
ゆうにちゝうくとしゝてゝもの
であひ
山合せへまりやア三味線をこう
さんど
三度ホ一度ゝも山方もゝ
やゝ極へう何も私ご通人ゆへ
あぎきう
そもホ仇きぷんよくおこまとう
わりめ
程度よおそのこごョ九そうる
ひと
人ゝたゝ通人のまげごろうョノウ。
ト云せとゝのごやア九程度よ

しゝくまろとゝおうの福造ご
そゝくマア一緒何ぞ程便よ
のうごゝとホいふのごへおめへどう
この
の小池ごョ桜川の名琴でもす
おまへバ
りうんとのふうべー
まごのと何ごうおめへ事でも
びしゃもん
況沙門天ゝ同じ系でもゝて出
この
ゝる何ゲ公の出中屋数よ

ことヤ　仇　ヨヤそうくそこ
そうよ　きさ
一所まで　ありくあのそこ
にありく雪隠くそのそこ
出すまり　米　中のことにモウ酔そ
まつことヨお鶏さんこそこ
ありいろ起　米　ナアニそうでも
何を喧嘩をするのご寺
よみそまり　米　ヨヤ由さん何ぞ
ころころ

亂ぐろ起　由　遠く極く着
ごと　ちげ
ごが由さん事　米　私ホアいとぐ
鬼のかまくとあつくおあ
おまぐ扉をいまこのとアか　米　ヨヤ
宝武治　米　お熊も米八が例へ居る　由　お寺さん八何ー
まく　由　ナニ何でもあのさ　由　米さんの
処へ相撲で座のそこをあ
座丸幸和田るのも笑

曲 そうろうんどう面倒ざのうう 朱「ア」
付知くすりこんぎく居る幸ざそうぐドレ折よトとよる
曲 一まるこるのぐく 女 門うく 真ア 朱「ヨリく」 空
おうり物のそん今りのざるのれ人お魅さんト都をえ
会せう門とうるうひちのとてまがるく法事紙とり門の
うきうう後くもめのきそうう紙いふ 朱「ざのさもち法うん
そ・ーまーさ 曲「どうぎこと 時代みせり姫ざの 朱「ア」 屋
ーれのめざうう子ハイ左程今ト頃りゆく。 映まるむ風お

服を着の裏紅葉の錦る秋あくばそト古人の名歌妙
今う程月ふ村雲花風ふひふさ年戒みさ江わ
ま八歌程よッイうーさる事ももりまさ村人のあをり
うう元来持る私をあるそ浮落る色事も終よも
まるく恭と義理ふ手まるく様よ好もる笑をそまるむ
うくぐひに浮くうさぐひすぐくうう舌ぐ元とうり死
ねるふこの約束成今月八んくく婚死の誓り成人さる
法う事くさふ仇敵の号のを中もそトあ江結んざる

旅の便りきこえで年ひ別まさく月と日の立にあそび
男女とも赤うさゑう波の色。わるとなく名のすさまふ浦う
かゝーうてで今八人の意ことを女方が思ひ
出すく主ゐる俗ふりあるを閻魔をうまた縁と八親兄
弟も當人も知ねえ舎利のまゝたとくせうまくきり
表不義うる形ひのありく他人の方へもくともあること
そ男のこうゐるにあらぬ事も満まゞかゝる妻の
うへ男のこうゐるにあらぬ事も満まゞかゝる妻の
あれて達あく中ゝあるとを縁

あまべさうさちぎり合ゐありて宝あげこゑのこゝろ
と事もあく其風の柳のあるまゝにおまつてをみてゞ。
儘と地りくたまもちりけり

かゝる社会ひあゝ妻を持つけ稼
と無常を感ーく筆ふぐ他も恨ゐぐ月日がそべ持
さを悔く捨ゝまてこゞ男の仕合せとうもありとゝ云のの
男の事一不義思ふく元をこ手まで不義のふくのる河を
一旦筆をこまるとも表八浅悔うぐひ事ゝ浅気を

よくよう
活業作もおようでね欲の部ひうう仕ホ
ごぐそうとき　　よく　ねが　　ようぐん　ホ
しうく共生財のて成共ひ親兄弟の強欲よひうまうく不
おや
実成すること多うまとういうぐる等のつのでよおるーて姫さの
いそん　　らうむしん　　あ
逸仁実見とまるも作者ダ痴の若婆公鳴呼これうぐう
おのこと　　ようろ
老込ありけりそまえさそおきこふまうこ訪そものづまうヨれ
ようろ　　いうりょうとらやう　　ようろ　　おと
うど勇や横町う稲荷の横町のこの辺うにうんひくまうくやうく
ひとが　　をとこ　　でおひ
人頼のうろう仕出合ダーうの男とげのしや〳〵ヨヤト　ようろ
もう　　あぐきも　　そしらうう
仁まうこまうこと仇吉と丹仁弟九〳〵マアちうりと　ようろ　　おうく

おうまうねへうんこにお里へのやうに内義さんをうことがうこと
殺〳〵丹さ　何さそうーどやうねぐ
き来さうーョ　作者曰栄八と丹公弟ダ　宅　ようろ　今内〳〵おまダ家をまうさーうく
そそそでうーちょうのとぐ〳〵子トあう嵐の若うトをそうとゆく
仇〳〵婚まうぎん　宅ようろ女の　ヨイーぐまうぎ　仇〳〵おまダョうあ〳〵ひうう
ひう　　お
今おまて人ぐだまも居ら　　く　　とのうヨト
仇〳〵遠八殺人あ　仇〳〵サアおそのうヨ
でく　　うち　　お
ひぐでも丹仁弟人ぐまうつく居ら表内より出く来ら八年公
ゆうくん　　お
二十六七のごろまうぐく出く　　で　　お
居さそのんやうを屑元も義し　　おと

春色辰巳園巻之二

江戸　狂訓亭主人著

第三回

東風（こち）「ふきの車（くるま）のわれ[illegible]夕頼（ゆふだの）の和の破車（やぶれぐるま）のそれもしかり

我妻（わがつま）棒（ぼう）のうしろへまわりてそれ[illegible]

こりゃアしまった成程（なるほど）こいつは業晒（わざさら）しだ嬢（じょう）

妹（いもせ）背（せ）の中（なか）成（なる）程（ほど）今日（こんにち）は嬢（じょう）

「ヲヤありやア何所（どこ）の奴（やつ）だ変（へん）ごょ姐（あね）

春色辰巳園巻之二終

いまごろのこまあまく八ぬくく極くさぐサ今ごーやアモウ兵の宅ぐ
そのとお業ーぐでヨのョあまくへのくまくくりい人八業やテーか
いョそ主こりろ今うの日けぐくそ支ころをぐあくおれョ
そんあおあまく家扱こといっくあくの才とうんぐてまく
あんまり扱あるてこうことまるぐろうーのこと
をお言ぐ更先達くあくまーぐくあくの
才のうくてこぐろうのようけうてもおまぐ一生女房ぐ持ぶ
うんぐぞとのふてとうあうーぐくとかう

ひ目にまりくく実現ぐーてくまるろうう自由ぶ言る好うく米八ダ
う外み注意ぐことでもあうくまくまを節化と思川てまんう
まあおあくの才扱うんぐくまバ自分ぐくそうーくうあうう
ぞようやあくバそうーそもさ最注世のうくの修ぶ
うあくとのふうちぶもぐあくく今自う四三日切まくく
ちまうくとのふてぐくこぐ八ぶ和まくこ二人が中とふ林くさんも
お初り自まるめくと宅でまく人でぶ思ぐ如ーて注く居る時ぐ
よくゆくあぐうく幼ぐくあぐのうぐぞあやう上うーとむ

「コけ」ぢゃ様のんでも郷このの宅の出来不出来あくをの
通りふうりんもちものがせあく結んで居る中へその日成和合
ろくそのご弟一のてごと思のョ人舎り仙の角を筆ずすごそ
まをいくあるふそんごふまヨヤもろくお教子をしこ仇さん
チット治れおそんふふうりごふ溝ごんでふさのご居さそ
ちごまこくョいころの害の横姪現そふつくいろやしい
貝紙をるも差ぐ完糸をることごろのご法ぐく順被の命
まをとちりきりとれおくョトさをそごその月も若多人名の

諸多をこころのろ実見もてがくと称ふものつ下さ
行協吉助ろ二人が額ろ人舎せ仇まこと仁協吉ぢんハ結
このョ丹一りんに伝切るくごのうう。イヤそをハそうこあ
ちゃうちゃおまこトろ様ふあ仇吉ハ仇アレサ丹
きんマアお待ちそんふうろくぼくぼうぜといハまりご
そうーごあるうこのうちとお出ョ丹そまごぐ宅へ客を
待しくあのこうョ仇お客ごそのめうう
来八ぢんが結ぐうごョ丹うんの

うまうみのめう 仇 ／＼ウさ ゑ〜てこんとも おどり 舟 コウもあ
ろうこと 赤ん人 おどこようねこうそのまゝ
ぐうん
我慢ぐくもつてゐるア ゐるも 仇 ／＼ヨヤ 私
ある
よこそのうへおいらひサア 今 の 仇 私が
ゐ社うち死〜こへ 舟 まこまゝおこ
もとこ 舟 の毒ざア 仇 ／＼そのかんしやく
ざこもひる 舟 ／＼おりこざこうこのそのこと
おどりざ 仇 ／＼アレサ ちやうくおこまをきうの他のまも

まこに 舟 ／＼みのおどり人地今ごろうト
ふのそまを 仇 ／＼舟さんとりやアあんまり
に他人 ゐ 笑うまこそらまてもまこ来ハぽんよみくまれ
こもおこへ人に 舟 ／＼すむと、笑うめく
今までく他こ上るもつろぐ ／＼着ぐくとりくさのぐ
亜こるとまる まに ／＼ぐろかこが せまいのやうにこれ
おどこをを私ぐ実がおまへ ／＼ト
ゑ 喰つく 舟 ／＼アイタ〜こまさく 嬉 ナもへ人まこ遠ざア

寝ざ起いつでもく〳〵で居る生〳〵うそ
嬶〳〵ヨマア第一あんぎゃうりのやうな
亜〳〵くやろうやまく〳〵せうのやうな
りやうりうぐわいの今日の繁〳〵
ざの「そうよのうドレそうでもねえがさ
〳〵くほとゞちのとつまりくろうヨ
イヨお嬢さんやのとまがすんざ
とのようくだらん処「そまどうざ

いのあくう「ガリ〳〵ありがとう
きの様ぐ〳〵ですかりまして「ようこそ
「まあさうぐ〳〵まんくヨそうぐ〳〵いそ
まてこと成〳〵せ「幸うよう「妙ふさうのおくさんぐをどう
ヨすまてヨヤ〳〵考ふうてくのう
そうぐ〳〵のを出〳〵ふりが出来ヨ
のう寅次さん「そうよ〳〵ぞうこども
あうれ〳〵せおくさんがそこの人のヤレ

✡「ヲイ〳〵琴さん〳〵お客さまの
そもし〳〵「そうそう〳〵まア〳〵お上り
そう〳〵〳〵のぞきこそでの嵐ざの
ざのう「何サ犯後の経事ざものゥ流人そのそぐざァ
あんたも勿論ねへのの我ゥ〳〵
の我もの「ド「その字も余程悪智ッ又
ぐゥこの老婦やどうもやろまうのぜうく
それにせんねへ紗ごさゑぢ糸抱へ
きっておくもの一ツ〳〵
一へんぶかやろうやく「それよりやア和哥町へ
箱記ぐるりの森羅殿ぢ〳〵
やんねへ✡「そうよのうゥ

ろうぐ「をく〳〵多賀町ゞアる「そまともまさせ今
年やア中堂ござそうぐ「又〳〵同ド「それ
まヨそまでものゥ〳〵ぐやく〳〵
赤ぬぐアゝトしてくれ「ヨやく〳〵そうぐッけそれ
きってお〳〵も一ツ〳〵
一へんぶかやろうやく「それよりやア和哥町へ
箱記ぐるりの森羅殿ぢ〳〵
やんねへ✡「そうよのうゥ

あまま来屋の方ハ少もふまうだう
空のいくとだろうそうくみるぜ大造とまろうう左様ざろうよ
ママちようどさうそうのヨそくうまごろうヨのう
そうくさみでくでございません
やうねうママめの空にくその
若父ぶすやくと来自由ざの
さりぱり尋やくやう程の
のう君ろろろうざろ
ぶぶぶうしてハ程へハ
ろハねせのう
いのざろうヨ
ろう
他の二階ぐやまうくろそ
ぐわうくろまでもハそろう

まるぐ呑だりでもわるへよもう酒ら遣者よろう
のハ米八ざんざのう
ろ
実にわのようでもまこのろまさろう
ろ
そうやアそうと机の空のヨけふぶふーさ
ナニ仕るぶこまろくめるの
よろ
そうヨよく米の空ぶぶまうくろそ
よろ
ぐわうくろまでもハそろう

こまとだつりやアうわぞこやうがねのう　□へ仇の字ざうく
もまく大器よ〳〵ちやアあげへ大器よ〳〵ちやアあげへ
ひきうとうやうさ稲へどやアあるめへよ　へそうのとんざりの
をやうかそのおいらアキウリと一盃やうう〳〵てのとらの
ときも来時の撞ボウンう〳〵〳〵そも寄合〳〵
おもう山猫さうしまきさんし〳〵かやうあるまでどその方なりく
見るときハ幸き幸仕舎所まくありく〳〵やすを
らう〳〵にあ〳〵ぞ逢さ雑きるの物おりひ衣裳のちゞれ

ぎの衣裳く裏の初日の出ようう　袖模様の縮うみ
くう名物八文庫に落名ぞ　拾小袖小夏衣裳やせ
あるきやうく光歌うぶる中に一人をおろうをだ員奴幸壮
うう候とあり　永借金とあり　結ぶ幸事やよ切まる
客せうまるる支をやうく〳〵よ雑まる　東八方の法あり金
のある本もあるやうに逢ひくコロうね欲の為女子ども
幸福道へ出るにてうまねうんぎとある〳〵元世ホ　仰
姫御逢分限よるてる英雄好まぐをうどくを帳

こゝろ悪と情欲こゝろにみよ
不実の人とあること珍らしや多くの人情こゝろ
一旦栄ゆる者わりこゝろ永き月日のその中に思ひの
あり雫落ちく後悔することうそひそ〳〵と男人
こゝろ色香ふとゝとうそりく煙草〳〵彼己惚の
姿小ゆもくくみ吸するに等しく日毎にうつも猪毛
こゝろの浅のおろ〳〵吸てく〳〵くうときをつく〳〵
不貞の女とうるまでと思ひくく親兄弟のたゝめよ

誓ふ不義不実というまる附ものうりの
がくもも線地道のまうつゞまる線ひ
こゝろ小柚摸の表の縁くゝ扇
ゆくく面〳〵うぐる行ひ親ばゞ
こゝろ縁ひくこゝろ方へ思ひ線ひ
こゝろくく実見ひうも作着が瘤
こゝろ袋流合点うくく
其名残も与惣町にさ雪うり〳〵仮住居内にさこゆる

三味線の絃もくへ〳〵と久しき流れの黄昏
一種川もせきうる涸チヨイト今こゝさんのそのやうに憂
き事ばかりさまざまのかわいそうのかわいそうのと一
寸の付合に思ふ主
流るゝ水のひそめいそ〳〵癪にかゝるのが癪さこゝ
文ちやんのお病人様の薬ようり。按摩さんさうり。
今貝さんへ来ておくれ〳〵と迷惑の

春色辰巳園巻之三

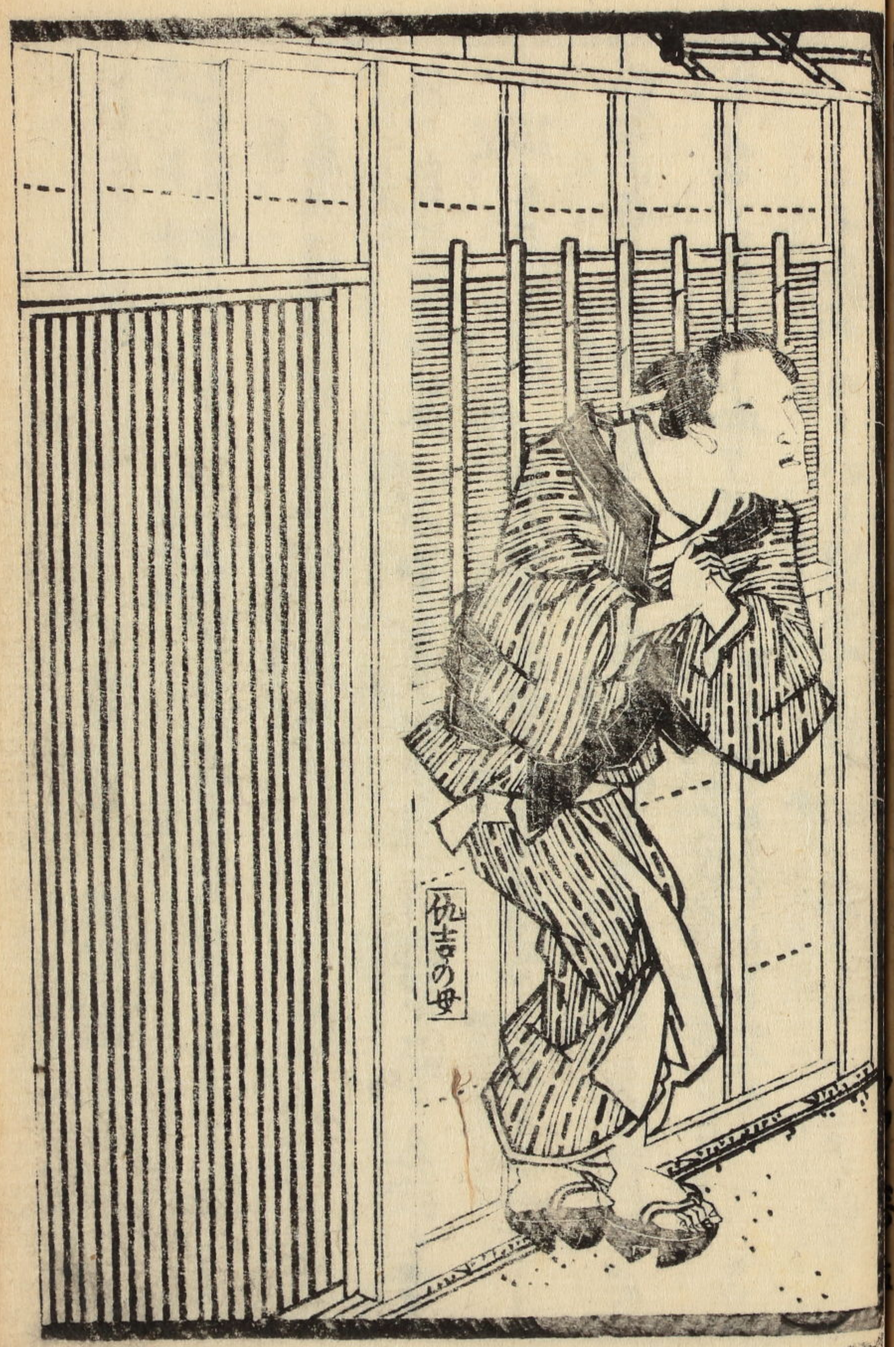
江戸

狂訓亭主人著

第五回

契情も唄女も元を乙女ごゝろ生所が別不有ゝ孫ど
も聞ゝき活業親の為ぬ不孝ゆゑ娘盛の七ツ
化粧ぐゝ子ゆゑの世の中に多くの親の不存と歎と我ゆの
出来ぬ人昨日ハそうりゃ他人の噂今日ハ我身の不幸不実
生涯ゝる過ぎき姪我来ハ札付の嬌婦よそぢそもそぢを考ゝ

春色辰巳園巻之三終


仇吉の母

仇吉

とうふやのこんでおまへアまだ
兄弟の中ぐらゐが一番おまに
ぐく自然は残さまでそうゐくのはぐ何を
私が自生をおこエまへおまへ
く降らぐりくるの仇へこんでそんなものさな
処がもやく歩行るナ仇へおまへ
おそろくもいゝやつ処ゆトあ一ヲヲヲ
くとこたやゐーのとうちやア処

先刻ごろ途中ぢうゐくげんかく居ろおんすりまやすまる
あヨ仇へおやまとやうおくろくるのヨ
この大きな奉の仇へこんな所に居てくヨヤその
居でくく寒ぐりやくうりやうおまへ仇へ乳飲ろんぐ
のくぐもいのぶき奉のまぐの
けるろいろくと仇へヨヤおまへこれ
私こそ寒ぐのやくく千ヤラレ
隣まへあろく千ヤラレ仇へコレそのあぐのうちへぐこれまるのぐ

ごろうけもごそうとのぐ米八さんが大そう若旦那とおもふの
そうごろ〳〵トいふ処へ姉おきやが秋葉様へ
当秋さんを祝ひ城の酔ざくらの一ノ
お秋の髪 ヲヤらしのもよう風ぐよくうつくしのよ
ごまごまいふも今参そうしろ
姉大喜紀との幸成御ざそうぢ
お城に拝判がいとサ狙剣亭とのよ
ゆきと姉と順吉のこと〳〵ひく完と相墨書とサ うんごさ

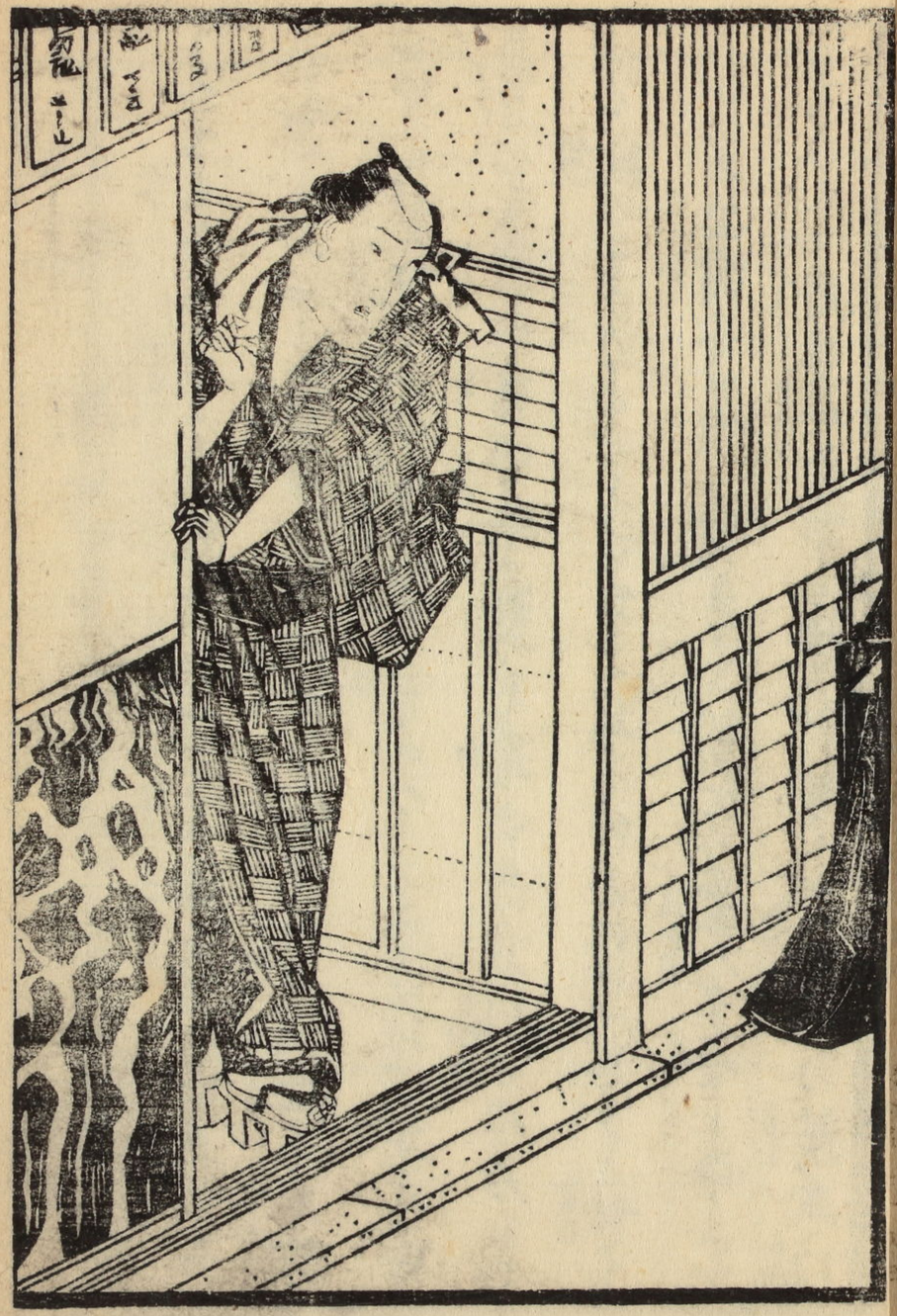
十六丁 作者 ㊞

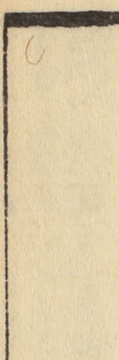
楽んぢう若んざうして居るのかそれへ
そのものの ㊞ ちんぷんかんとよいふ
ゆるがよくことでけ 冬ちあぢ動ると
いろ〳〵様ちさこぢ出本さこさぢた
のーこもちうそうヨノ ㊞ 夕兵衛本通
こへ新〳〵の言まぢの延喜笑さんが
さんぢる兵さこ冊ぢりに当つくみるとヨめんどうを流かいち

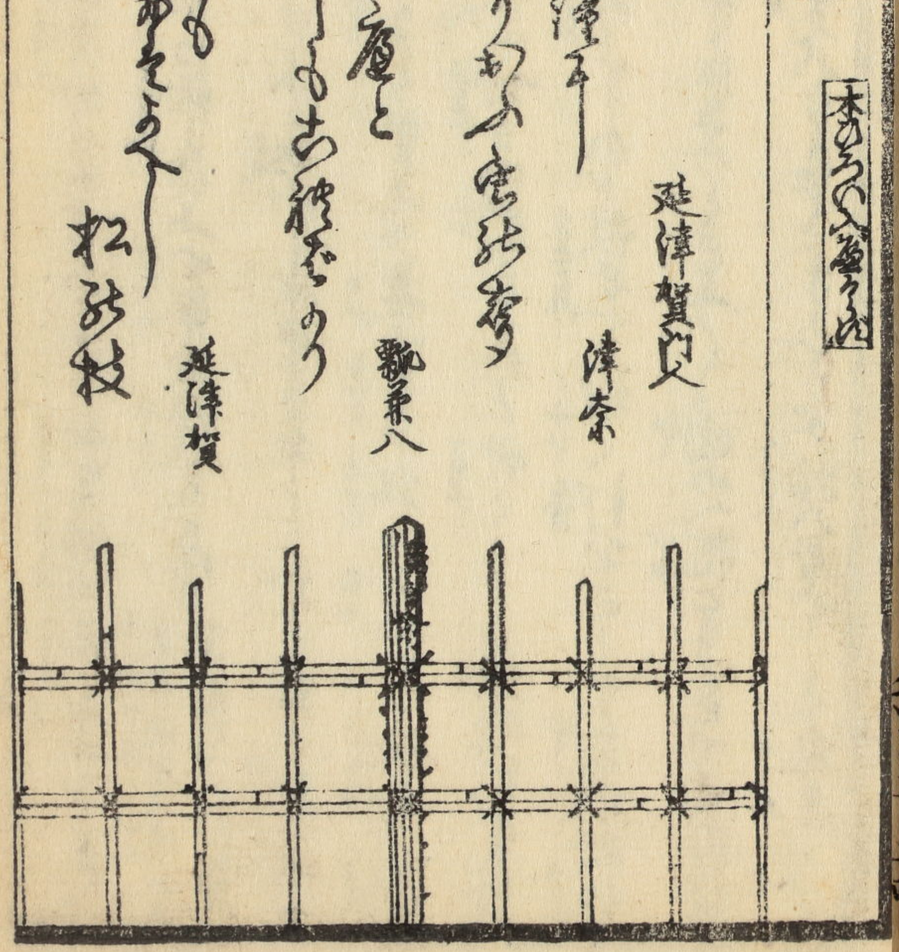
お出でかな丁度幸の事ぢゃ遠慮なしに
うちふ頼みまするのう　米一めんそう丹
西の二階もござる長うござる　丹
智恵もござる八軒の中で唯一人
才覚ぢゃと思うそれ他人扱いに
思ぐるしもせう思てござりまするやう
ご＊ざ　丹
ゆーまをあにしてござりまする　丹
いやおそうござる米一ごうの事ぢゃ仇の
ござる　丹
えん丹さん姫ごぢゃござるで私も
ござる　丹
に一度はおまゐりまする事ぢゃござる
ござる　丹
ござう都へ苦労にござりまするとも
ござる　丹
ござる　丹
ござる　丹

何今のさつき人遠ひサ来て飛ぶんあてとをゝさなゝ娘おさんそ旦那も亭主もありやア妻のヨ戸細町の倉小屋居るさんが通ふ頃ハ殊の外妓ぶんぞ来てゐるとゝのつまりハさんざ旦那ぶんぞとそれとさんが業知しれた事サ何ぼ小池の宅へ居さんの兄さんと湯治場迄の広をしてさんのやうでさつき迄てきつく思ふヨ好男ぶこゝろ

ゐまた人とあまたこの宅へつきく約束ぶ仰一仇吉さんハ姉妹の格ぶもるとでそうゐ知つく居まも一そうゐ知つく居まも一そうそ丑下ゞやアその娘さんのけさんざろうゐアまこるく推量ぶく旦那ぶと思つて居ぶ附のい来ゐアイ色人につぞハろふと知つてに急つく居ぶ〳〵のやう〳〵い亭主ぶろうて妓ぶもできすぶとさげ〳〵も来ろう〳〵まゝのこゝも勝負ぶまろと実出さまくも並ハ口のきけ様ぶ男ぶざろう〳〵







木のろの入る笹戸

延津解賀内

津奈

入相の鐘

ちりあひの雲

牡丹屋と

申す茶屋の

をちこちも

梅も桜も

松も杉も

延津賀

で
なつこやうにこゝがるおろうじやうな容も有一他よりも勝れた風
りくち　ようで
俗形をもつた流よきやうにいやらしくもなくこゝろの
うって
こんな務めをする娘女ゝがあればこそで
き　　ふだつき　を
さありくまわるく山所の古地で札付の男ぎらひと名をとる
ふうぐどん今ホ若い男をまつこゝろのうちホ嬉しく我儘を
いへばこのくそこじやア私が悪ひでもおまへの男利ゲごろうろう
いろ　　あいそ
うんぞこゝろ〳〵粧のこと見れば
も何ら復がおろくこゝ出〳〵切に上私やア美婦を持さう〳〵お

まへもそのさまざく居くおつもとトおつ
しやつてらうのと
さぞ丹次郎えより當ゐ出〳〵
丹「ろくでとのくどおもるこまご
いき気性ぢやアないとおつしやるまご切きつねへ
その間をやりおろうかう御りう今ごトゐへば栄八宅へ公に
ちよくへ御ふ飛脚く　丹「コリヤ栄八御りう今ごトゐへば私ごの日ホ八御
やうホ仕形ごのつもりもあり
でもそんなにやアねろう　丹「よのヨコろ〳〵で私ごの日のいろ

ござるお女将さ　丹「ナニ何もめくそも我作入らせねえ
に服さ入ってくろそでうりをござ〜来八ダ入命のまん丹次郎さま
れんョ　そまでござまとるぬのご　来「ヘー死んで亭主我それそのサ　丹「ヘ
うござまる仲をもつどのの。ヨイそこそこそのサ
の栄結堂呪そそ〜もの〜ねそのそこそこ小池のお嬢さま逢
様の毘沙門さまうり石丹次郎ダ薄手我娘　丹「さん

由さんがそうしつくよそ〜ござ山るの唄の文句が出ますね
ばあさまとサ。ヨヤまさんお坐のね
ね　来「ハお嬢さん王ウく丹さんが座
でもそこそこちりあトしのそちそこ来八さ多事彩を注けてさ
ざ　丹「ヨヤ面影のトさそこ居くる呑む　来「アアおわびの一ツ三
トーうお嬢さんさん性悪の男の所へおわびでござ　丹「つまら
らほんとだ何うしのハア　来「大違ひこの又
そそでも私女郎ぐよるョトしの酔次郎の

春ノ色辰巳園巻之三終

こま
黒ようり飾お仇妻が興奴の宍の極秘密いろ〳〵
八仇妻ゑ嬉悦の転倒の奇く妙技辰巳の園の後編
三冊揃ぐのく出境を極ゞひ上り

おとやつこ つくし
妻如の役ぐくらちあくまちうくかの招妻がうちようえ
しくずる仇妻ゑ嬉悦の転倒の奇く妙技辰巳の園の後編
栄八にこえるのやうにくゆびと出くる妻八「ドレ
小用にいつのやト外へ出るそこで河ちやうど仇妻がうしろ姿
見送りくせきく川栄八仇妻もも離ぶそこえに栄八が長屋
と称ゑ女の情色八玄地ぐんく玄性金今成そるまてく実情
にうまてさ事性とうるまの水性ともや玄行の相生相克とも
節しくく高人の妻 一気呵成さの出境る〳〵